

$f(x), g(x)$  は実数全体において微分可能な関数とする。以下の問いに答えよ。

- (1)  $f(x)$  は実数全体において連続であることを示せ。
- (2) 実数  $a$  は定数とする。  $f(x)$  が  $x = a$  で極大であるとき、  $f'(a) = 0$  であることを示せ。
- (3) 積の微分公式  $\{f(x)g(x)\}' = f'(x)g(x) + f(x)g'(x)$  が成り立つことを導関数の定義を用いて示せ。
- (4) すべての自然数  $n$  について、第  $n$  次導関数  $f^{(n)}(x), g^{(n)}(x)$  が存在するものとする。すべての自然数  $n$  と  $F(x) = f(x)g(x)$  の第  $n$  次導関数  $F^{(n)}(x)$  について、次のライプニッツの公式が成り立つことを示せ。

$$F^{(n)}(x) = \sum_{j=0}^n nC_j f^{(n-j)}(x)g^{(j)}(x) \quad \dots\dots \textcircled{1}$$

ただし、  $f^{(0)}(x) = f(x), g^{(0)}(x) = g(x)$  である。

(22 福島県医大 医 4)

【答】

- (1) 略
- (2) 略
- (3) 略
- (4) 略

【解答】

- (1)  $f(x)$  は実数全体において微分可能な関数なので、任意の実数  $a$  に対し、  $\lim_{x \rightarrow a} \frac{f(x) - f(a)}{x - a}$  は収束し、その値は  $f'(a)$ 、すなわち

$$\lim_{x \rightarrow a} \frac{f(x) - f(a)}{x - a} = f'(a)$$

である。

$$\lim_{x \rightarrow a} \{f(x) - f(a)\} = \lim_{h \rightarrow 0} \left\{ \frac{f(x) - f(a)}{x - a} \cdot (x - a) \right\} = f'(a) \cdot 0 = 0$$

すなわち、任意の実数  $a$  に対して

$$\lim_{x \rightarrow a} f(x) = f(a)$$

が成り立つ。よって、  $f(x)$  は実数全体で連続である。 …… (証明終わり)

- (2)  $f(x)$  が  $x = a$  で極大であるから、  $a$  を含む十分小さい开区間において  $x \neq a$  ならば  $f(x) < f(a)$  が成り立つ。この开区間において

$$x < a \text{ のとき, } \frac{f(x) - f(a)}{x - a} > 0 \quad \therefore \lim_{x \rightarrow a-0} \frac{f(x) - f(a)}{x - a} \geq 0 \quad \dots\dots \textcircled{1}$$

$$x > a \text{ のとき, } \frac{f(x) - f(a)}{x - a} < 0 \quad \therefore \lim_{x \rightarrow a+0} \frac{f(x) - f(a)}{x - a} \leq 0 \quad \dots\dots \textcircled{2}$$

$f(x)$  は微分可能であるから、  $\lim_{x \rightarrow a} \frac{f(x) - f(a)}{x - a}$  は収束し、その値は  $f'(a)$ 、すなわち

$$\lim_{x \rightarrow a} \frac{f(x) - f(a)}{x - a} = f'(a)$$

である。①, ② とあわせると

$$f'(a) = 0$$

である。

…… (証明終わり)

- 背理法を用いる。

$$\lim_{x \rightarrow a} \frac{f(x) - f(a)}{x - a} = f'(a)$$

について,  $f'(a) \neq 0$  と仮定する。

- (i)  $f'(a) > 0$  と仮定すると,  $x$  が  $a$  に十分近いとき  $\frac{f(x) - f(a)}{x - a} > 0$  である。

$x > a$  のとき

$$f(x) - f(a) > 0, \text{ すなわち } f(x) > f(a)$$

となるが, これは  $f(x)$  が  $x = a$  で極大であることに反する。

- (ii)  $f'(a) < 0$  と仮定すると,  $x$  が  $a$  に十分近いとき  $\frac{f(x) - f(a)}{x - a} < 0$  である。

$x < a$  のとき

$$f(x) - f(a) > 0, \text{ すなわち } f(x) > f(a)$$

となるが, これは  $f(x)$  が  $x = a$  で極大であることに反する。

- (i), (ii) により,  $f(x)$  が  $x = a$  で極大であるならば,  $f'(a) = 0$  である。

### (3) 導関数の定義より

$$\begin{aligned} \{f(x)g(x)\}' &= \lim_{h \rightarrow 0} \frac{f(x+h)g(x+h) - f(x)g(x)}{h} \\ &= \lim_{h \rightarrow 0} \frac{\{f(x+h) - f(x)\}g(x+h) + f(x)\{g(x+h) - g(x)\}}{h} \\ &= \lim_{h \rightarrow 0} \left\{ \frac{f(x+h) - f(x)}{h} \cdot g(x+h) + f(x) \cdot \frac{g(x+h) - g(x)}{h} \right\} \end{aligned}$$

$f(x)$ ,  $g(x)$  は微分可能であるから

$$\lim_{h \rightarrow 0} \frac{f(x+h) - f(x)}{h} = f'(x), \quad \lim_{h \rightarrow 0} \frac{g(x+h) - g(x)}{h} = g'(x)$$

(1) により  $g(x)$  は連続であるから

$$\lim_{h \rightarrow 0} g(x+h) = g(x)$$

が成り立ち

$$\{f(x)g(x)\}' = f'(x)g(x) + f(x)g'(x)$$

が成り立つ。

…… (証明終わり)

- (4) 何回でも微分可能な関数  $f(x)$ ,  $g(x)$  の積  $F(x) = f(x)g(x)$  について, すべての自然数  $n$  に対し

$$F^{(n)}(x) = \sum_{j=0}^n {}_n C_j f^{(n-j)}(x)g^{(j)}(x) \quad (\text{ライプニッツの公式}) \quad \text{…… } \textcircled{1}$$

が成り立つことを,  $n$  に関する数学的帰納法で証明する。

- (i)  $n = 1$  のとき,  $\textcircled{1}$  は

$$\begin{aligned} F^{(1)}(x) &= \sum_{j=0}^1 {}_1 C_j f^{(1-j)}(x)g^{(j)}(x) \\ &= {}_1 C_0 f^{(1)}(x)g^{(0)}(x) + {}_1 C_1 f^{(0)}(x)g^{(1)}(x) \\ &= f'(x)g(x) + f(x)g'(x) \end{aligned}$$

であり, これは (3) で証明済み.  $n = 1$  のとき  $\textcircled{1}$  が成り立つ。

(ii)  $n = k$  のとき, ㊦ が成り立つと仮定する.

$$\begin{aligned}
F^{(k+1)}(x) &= \frac{d}{dx} F^{(k)}(x) \\
&= \frac{d}{dx} \sum_{j=0}^k {}_k C_j f^{(k-j)}(x) g^{(j)}(x) \\
&= \sum_{j=0}^k \left\{ {}_k C_j \frac{d}{dx} f^{(k-j)}(x) g^{(j)}(x) \right\} \\
&= \sum_{j=0}^k \left\{ {}_k C_j \left( f^{(k-j+1)}(x) g^{(j)}(x) + f^{(k-j)}(x) g^{(j+1)}(x) \right) \right\} \quad (\because (3)) \\
&= \sum_{j=0}^k {}_k C_j f^{(k-j+1)}(x) g^{(j)}(x) + \sum_{j=0}^k {}_k C_j f^{(k-j)}(x) g^{(j+1)}(x) \\
&= \sum_{j=0}^k {}_k C_j f^{(k+1-j)}(x) g^{(j)}(x) + \sum_{j=1}^{k+1} {}_k C_{j-1} f^{(k+1-j)}(x) g^{(j)}(x) \\
&= {}_k C_0 f^{(k+1)}(x) g^{(0)}(x) + \sum_{j=1}^k ({}_k C_j + {}_k C_{j-1}) f^{(k+1-j)}(x) g^{(j)}(x) \\
&\quad + {}_k C_k f^{(0)}(x) g^{(k+1)}(x)
\end{aligned}$$

となる. 二項係数の性質として

$${}_k C_0 = {}_{k+1} C_0, \quad {}_k C_j + {}_k C_{j-1} = {}_{k+1} C_j \quad (1 \leq j \leq k), \quad {}_k C_k = {}_{k+1} C_{k+1}$$

が成り立つから

$$\begin{aligned}
F^{(k+1)}(x) &= {}_{k+1} C_0 f^{(k+1)}(x) g^{(0)}(x) + \sum_{j=1}^k {}_{k+1} C_j f^{(k+1-j)}(x) g^{(j)}(x) \\
&\quad + {}_{k+1} C_{k+1} f^{(0)}(x) g^{(k+1)}(x) \\
&= \sum_{j=0}^{k+1} {}_{k+1} C_j f^{(k+1-j)}(x) g^{(j)}(x)
\end{aligned}$$

となる.  $n = k + 1$  のときも ㊦ が成り立つ.

以上, (i), (ii) より, すべての自然数  $n$  に対し ㊦ が成り立つ. …… (証明終わり)